

ユースワーカーって何？

～家庭・学校・働く場と若者たち～

京都市ユースサービス協会常務理事・事業部長

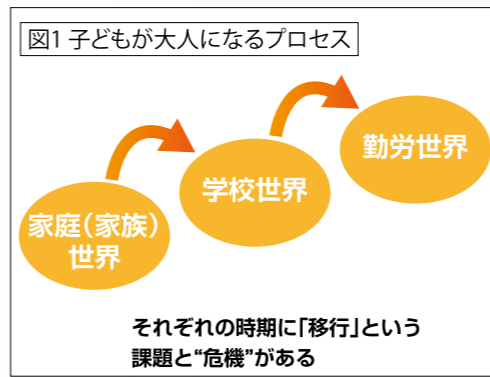
水野篤夫



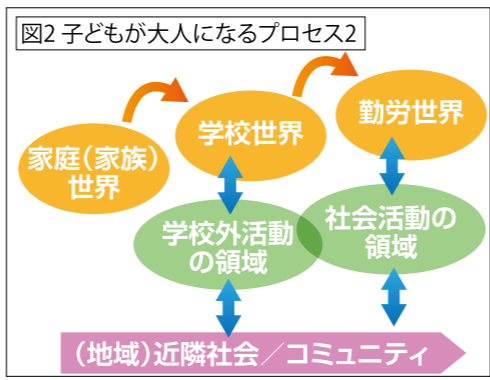
「ユースワーカーは、子どもが責任ある大人として成長していくことを支援します！」と標榜しているのですが、ではどのように「子ども」は「大人」になるのでしょうか。最近の大学生に「君たちは自分を大人と思うか？」と聞くと、ほぼ9割以上が、「自分は大人ではない」と答えるそうです。その理由を尋ねると、「経済的に自立していないから」「自分だけで判断できないから」「親元で面倒見てもらって生活しているから」といったことが挙げられます。

一般的に、子どもが大人になっていく定型的なプロセスを図示すると、図1のように説明されます。親の世話を受けながら家庭中心で育ち始めた子どもも、通学年齢になると学校中心の世界で生きるようになります。しかし、長く続く学校世界も、卒業したり中退

をもって終わり、「若者」や「青年」と言われる年代になるとともに、働くことを中心とする世界に移っていくことを求められます。図1では、勤労世界という言葉で表しています。そして、フルタイムで働き出すと、周囲の人からは「やっ」と〇〇さんも自立したね」と言われるようになる訳です。ここで、



親元から離れて、自活すること、結婚して自らの家庭を持つための条件が出来たと見なされ、それが「大人になる」ということを意味するという考え方です。
しかしながら、家庭(家族)にしろ学校にしろ、それぞれが社会から切り離されて成り立っている訳でないことを見逃してはいけません。育った地域の影響を受けない子どもはいませんし、学校が生徒の生活する地域という基盤の上に成り立っていることは、地域の経済格差によって学校間の学力差が明確にあるという事実から説明することが出来ます。にも拘らず、地域社会の規定性が全体として低下している中で、個々の家庭、地域にある学校に重圧が掛かっているのです。そして、その中で育つ子どもや若者は、「自己責任」で生き抜くことを求められます。それは、働き出した若者を巡る議論にも当てはまるもので、働く場しか持たずに長時間仕事に拘束される働き方をしていると、その場の問題があっても(例えばブラック企業のような働き方をさせられる)、トラブルにあっても(人間関係での問題や、仕事での失敗など)逃げる場が無いことになってしまい、自分一人でそれを抱え込むことになりがちなので、広い意味での社会的な活動に関わって、地域



そうだった。だから友だちもできなかった」と。そんな彼女がしたことは、青少年施設での活動を通して友だちを作っていくことでした。いろいろなグループ(サークル)に参加し、そこで「一命懸け、周囲に気を配り関係づくりの『種蒔き』をしたのでしよう。そんな中で「ここでは友だちもできた。AさんとかBさんとか」と話すようになります。彼女はその後何と何仕事を続けながらさまざまな活動に参加していきました。年齢だけからいえば、もう「大人」と言われるのかもしれないですが、彼女が自立していくためには、家と職場だけではなく、第三の場で経験を積んでいくことが必要だったのです。



「20代鍋の会」(南青少年活動センター)

合っているという話も聞きます。10代の若者にとつての学校外活動の領域と同様、20代など学校を離れた若者にとつても、社会と関わる活動の場を持つ意味は大きいのです。人と人が支え合う力を発揮できなくなっている地域社会と、その中で漂流する若者が、社会とつながっていくことができるための、学校外・働く場の社会活動領域を豊かにしていくことが必要なことだといえるでしょう。子どもが大人になるサポートをする、とこれまでユースワーカーの役割を説明してきたのですが、このことこそが、ユースワーカーの働く領域と役割なのだと思えるようになっていっています。

でしょうか。学校から離れた若者は、働くこと・そこで稼ぐことが重要とされる世界に身を置くこととなります。20代になると地域からも離れる若者も多く、働く場と住まいとの往復で一日が終わるような生活も一般的です。そんな若者にとつても、社会活動の場を持つことは大きな意味を持ちます。昔の話なのですが、ある青少年施設で出会った若者のエピソードを紹介いたします。彼女は20代後半。高卒後、電機部品メーカーの工場のラインで働いていました。ある時彼女が、習い事をしている青少年施設にとつても暗い顔をしてやってきました。私が声を掛けると彼女は、「会社でいじめられている……」と語り始めました。「周りの人に気を配るといふ種蒔いてこなかったからいけないんや。学校時代も

ユースサービス協会が運営する施設である青少年活動センターの事業で、「20代鍋の会」という事業がありました。20代限定で平日夕方に集まって鍋を囲んでしゃべるといふ事業です。ここには、働いている人も学生も働いていない人も集まってくるのですが、それぞれ悩みや不安、しゃべりたいことがあって、学校でも会社でも家でもないこんな場でこそしゃべれることを楽しんでいきます。非正規で働く女性同士が出会い、その後も連絡を取り合いながら支え

やコミュニティ(必ずしも地縁的なものでなくても)で居場所を持つことがとても重要になっているのです。

また、図1でイメージされる「定型的な」成長過程に乗れないか、はずれてしまう若者も多くなります。不登校という形で、学校世界からある意味「離脱」していく子ども・若者は10万人を超え、減る様子を見せません。働く段階で立ち止まってしまったり、働き始めてからも躓いたり傷ついて働けなくなってしまう若者は60万とも70万とも言われます。そもそも、子どもの貧困率が16%あまりになっっている事実を考えれば、経済的な問題を抱えた家庭が増加し、何らかの支えが必要な子どもや家庭が増えていることは確かでしょう。そこで、定型的な成長を前提とする場を支え補う場がいずれの世界においても必要となっているのです。

そう考えると、家庭・学校・働く場と、ベースにある地域社会・コミュニティと子どもや若者との間にあって両者をつなぐ活動が、今とても重要になってきています(図2の学校外活動の領域・社会活動の領域)。そして、そここそがユースワーカーの活動領域です。前回は中高生年代の話をしました。が、働く場における若者はどうで



知不如学 学不如楽 楽在其中 享在其境

～知るより学ぶ 学ぶより楽しむ 楽しみは其中にあり その境地を悟る～

語学教室を通して、より広く、深く中国文化を楽しんでいます。就学前のお子さんの鉛筆の持ち方から運筆、シニアの方には四書五経や中国古代からの教え、皇帝内経にもとづいた季節の養生法など幅広く学んでいます。

長岡京バンビオ教室・四条教室・国際交流会館教室・御陵教室など

詳しくはHPをご覧ください

株式会社 学楽 〒600-8431 京都市下京区善長寺町 131 西澤ビル 301

TEL : 075-777-7711 E-Mail : gakuraku@ae.auone-net.jp http://www.haowenyuan.com/